

「発展」を越える、新しい歴史叙述の可能性

：韓国における植民地期経済史研究の行方

梁 知恵（東北亜歴史財団）

原文は韓国語、翻訳：尹在彦

加速化している気候変動や不平等の中で、歴史学は根本的な問いに直面している。燃えているごみの山と極端な格差の前で、「発展」というロマンティックな寓話はその力を失った。歴史家たちは真新しい疑問に向き合わなければならない状況に置かれている。「発展」の向こうへ進む新しい歴史の書き方は可能であるか、という疑問である。本発表では2000年代以降の20年間にわたり、韓国で進められてきた植民地期経済史研究を振り返り、「発展」の向こうへ進む歴史の書き方の可能性を探索する。

良く知られているように、韓国では2000年代前後に植民地収奪論、植民地近代化論、植民地近代性論等、多様かつ重要な論争の核心的な議論が展開されていた。これに対して、既存の歴史学史はこれらの論争が頂点に達した2000年代前後の時点でその分析に決着をつけ、それからの20年間の議論はミクロで細分化し、ばらばらになったという理由で十分分析してこなかった。本発表では各産業分野及びそのテーマを中心として、最近の研究動向を取りまとめ、「発展」という中心の中と外から新しい議論が出現していることに注目する。

■梁 知恵 (YANG, Jihye)

2021年漢陽大学大学院史学科博士修了。東北アジア歴史財団研究委員。韓国近現代の社会経済史、生態環境史専攻。

主な著作：‘植民地期朝鮮における日本窒素の水力発電所建設と「開発難民」問題，日韓相互認識 9, 2019年。

A Locked City: The Japanese Company Nitchitsu’s Building of Hŭngnam, Seoul Journal of Japanese Studies 8, 2022年。

Competing Memories of Mega-

Dam Development in Colonial Korea: From Science to Disaster, Acta Koreana, 25-2, 2022年。